日本の歴史23
『ながさき稲佐ロシア村』

松竹秀雄著（長崎文献社　2009年）
本書の請求記号　219.3-Mat

稲垣　宏行

幕末から始まった長崎とロシアの繋がり

安政五（1858）年、長崎市にある稲佐にロシアのプチャーチン提督麾下（きか）の艦隊が、敵国としてクリミア戦争に参戦してきた英仏艦隊に対する防備と日本との修好通商条約締結のために来航しました。この訪日は、彼にとって安政元（1854）年の条約締結以降二度目となります。その際、艦の修理や病に罹った乗組員の療養も兼ねて、同地にある悟真寺が仮の宿泊地として使用されました。これが、日露戦争の勃発する明治三十七（1904）年までの約50年間ロシア人の滞在地として賑わうきっかけとなりました。特に明治以降、稲佐はロシア村と呼ばれるほど、ウラジオストックなどでも有名になりました。

このロシア人との交流によって、長崎では日本人が予測していなかったことがいくつか起こりました。ロシア人が多く長崎を訪れたことがきっかけで、稲佐遊郭のはじまりとされるロシアマタロス休息所が万延元（1860）年頃に出来ています。ロシア正教会や海軍病院などの施設を置くために、地元の有力者による土地の提供も行われました。また、ロシア語の通詞である「志賀庄屋一族」や休息所でロシア兵の接客を勤めた「道永（みちなが）お栄（えい）」など、ロシアに精通し、幕末以降もロシアとの交流を円滑に進めた人々も登場しました。

さらに、本書では嘉永七（1854）年頃、アメリカ船に密航を求めた吉田松陰が、この事件の一年前のプチャーチン来航時に同じく密航を画策し、長崎を訪れロシアの内情を調査しようとしていたことも注目すべき出来事として取りあげられています。

長崎で生まれた著者は、平成八（1996）年以降、稲佐地区の調査に没頭していました。この中で著者は、プチャーチン来航の約50年前に開国を求めて来日したレザノフ特使らが文化二（1805）年頃、日本人が初めて目にする気球を長崎で揚げていたことを書いています。その時に造られた記念碑が300メートル移転していた件では、日本国内だけでなくロシアまで調査を進め、ロシア人有識者にも気球の件での情報協力を要請していました。

本書には稲佐村やマタロス休息所の当時の地図なども載せています。その他にも、ロシア人宿泊先の事務簿やロシア領事館、ロシアの海軍借地、さらにはロシア兵がよく利用していたとされる料理屋ホテルヴェスナを写した明治期の写真が掲載されています。

長崎の出島は鎖国下唯一の貿易港でした。ただ、その当時のロシアは正式な交流ができる国ではありませんでした。また、和親条約が結ばれた安政元（1854）年以降のロシアと長崎の関係の詳細についても良く知られていないようです。しかし、その関係の上にパイプが出来ていたからこそ、日露戦争終結後、この地を訪れたロシアの将軍ステッセルが、意外にも住民に好意的に迎えられたという現象が起こったのではないでしょうか。

このように、長崎におけるロシアとの出会いは、両国の人々の間でいくつかの社会的現象を引き起こしました。日本との通商条約の締結と共に、ヨーロッパで起こった戦争の余波が極東にまで波及したことが交流の発端ですが、特に国際戦争の影響は日本が世界の動きと無関係ではなくなったということをロシアを通じて知ったものと考えられます。

本書は長崎とロシアの交流の名残を掘り起こすことを主としています。その中には交流の歴史を誇りとする稲佐の人々の姿が見えます。しかし、同時に当時の日本の情勢やロシアとの文化的相違を原因とする両者の軋轢も見え隠れします。日露関係史を見つめる上では、このように表面に表れていない事柄も充分に考慮する必要があるのではないかと、本書を通じて感じるのです。

いながき　ひろゆき（司書・情報サービス課）